

國際會議情報並びに調査報告

寧波における國際シンポジウム並びに浙江省寺院調査報告

久保田 正 宏

一 はじめに

二〇一六年十一月二十四日から二十九日までの日程で、中國浙江省の天台山、寧波市内の諸寺院、そして普陀山の調査が行われた。また、この途中、十一月二十六日には、寧波市江東區のホテルの會議室で、國際シンポジウム「漢字文化と佛教」が開催された。

國際シンポジウムと本寺院調査は、大久保良峻先生（早稲田大學）が研究代表者を務める科學研究費助成事業、基盤研究（A）「多分野複合の視角から見た日本佛教の國際的研究」の例會で發案されたものである。同事業は、大久保良峻代表と、上島享（京都大學）、菊地大樹（東京大學）、曾根原理（東

北大學、龔輪顯量（東京大學）、吉田一彦（名古屋市立大學）の五氏の研究分擔者、そして、原田正俊（關西大學）と林淳（愛知學院大學）の二氏の研究協力者で構成されている。

本寺院調査の大まかな日程表と参加者は以下の通りである。

日程表

十一月二十四日（木）

十三時 空路にて杭州空港に到着。到着後、大型バス

で台州市へ向かう。

十七時 台州市天台縣の天台山大酒店（ホテル）に到着。

十八時半 ホテル近くのレストランで夕食。

二十時 ホテルに歸着。

十一月二十五日（金）

五時 國清寺の勤行に參列。

七時 天台山大酒店（ホテル）で朝食。

八時半 國清寺を視察。天台山方丈、允觀師と面會。

十一時半 中方廣寺、下方廣寺、石梁飛瀑を視察。

十三時 天台山内のホテルで晝食。

十四時 眞覺寺を視察。

十五時 高明寺を視察。視察後、大型バスで寧波市へ向かう。

十九時 寧波市内のレストランで夕食。

二十一時 寧波市の寧波東港波特曼酒店（ホテル）に到着。

十一月二十六日（土）

七時 七塔寺を視察。七塔寺方丈、可祥師と面會。

八時半 寧波東港喜來登酒店（ホテル）で朝食。

九時半 同ホテルで國際シンポジウム（午前の部）を開催。

十二時半 七塔寺で晝食。

十三時半 七塔寺の圖書館を視察。

十四時 同ホテルで國際シンポジウム（午後の部）を

開催。

十八時半 天童寺を視察。視察後、同寺で夕食。

二十時 天童寺方丈、誠信師と面會。

二十一時半 寧波東港波特曼酒店（ホテル）に歸着。

十一月二十七日（日）

八時 寧波東港喜來登酒店（ホテル）で朝食。

十時半 阿育王寺を視察。

十三時半 寧波市内のホテルで晝食。晝食後、大型バスで舟山島へ向かう。

十六時 舟山島の船着場に到着。到着後、快速船で普陀山へ向かう。

十七時半 普陀山の中信普陀酒店（ホテル）に到着。

十八時 ホテルで夕食。

十一月二十八日（月）

七時 中信普陀酒店（ホテル）で朝食。

八時半 紫竹林を視察。

九時半 潮音洞、不肯去觀音院、補怛紫竹林院を視察。

十時半 南海觀音を視察。

十二時半 普濟寺を視察。

普濟寺付近のレストランで晝食。晝食後、快

寧波における國際シンポジウム並びに浙江省寺院調査報告（久保田）

速船で舟山島へ向かう。

十四時 舟山島の船着場に到着。到着後、大型バスで

杭州市へ向かう。

十八時 杭州市の百合花飯店(ホテル)に到着。

十九時 ホテルで夕食。

十一月二十九日(火)

八時 百合花飯店(ホテル)で朝食。朝食後、大型

バスで杭州空港へ向かう。

十一時半 杭州空港に到着。到着後、解散。

十四時 空路にて杭州空港を出發し歸國。

参加者(五十音順)

市岡聰(名古屋市立大學、上島享(京都大學、大久保良峻(早稲田大學)、大鹿 眞央(早稲田大學・大正大學)、庵谷行遠(早稲田大學學院)、岡田文弘(東京大學大學院)、菊地大樹(東京大學)、工藤 量導(大正大學)、久保田 正宏(早稲田大學大學院)、胡建明(早稲田大學大學院、佐伯 憲洋(早稲田大學大學院)、櫻井唯(早稲田大學大學院)、佐藤 晃(早稲田大學)、佐藤 文子(佛教大學)、柴田 憲良(名古屋市立大學)、池 美玲(韓國藝術綜合大學)、曾根原理(東北大學)、田戸 大智(早稲田大學)、寺本

亮晉(大正大學綜合佛教研究所)、トーマス・ニューホール(東京大學大學院)、永田 道子(作家、梓澤要)、成瀬隆順(早稲田大學大學院)、原口 耕一郎(安徽大學外語學院)、フランチェスカ・タロッコ(ニューヨーク大學上海)、間島 由美子(中京大學)、松本 知己(法政大學、眞野 新也(早稲田大學)、龔 顯量(東京大學)、柳澤 正志(早稲田大學)、弓場 苗生子(天台宗典編纂所)、吉田 一彦(名古屋市立大學)、劉 鹿鳴(南京大學)、ルチア・ドルチェ(ロンドン大學)、王 芳(臺灣中央研究院中國文哲研究所)

以上敬稱略

参加者は全三十四名であった。なお、胡建明氏には、國際シンポジウムと本寺院調査の準備の段階から、大變な盡力をして頂いた。また、王芳氏にも、シンポジウムにおける通譯等、多大な協力をして頂いた。

以下、本稿では、まず、寺院調査の内容を報告する。また、國際シンポジウムについては、最後に概要を報告する。

二 寺院調査報告

十一月二十四日(木)

この日の東京の天氣は雪であった。東京都心において、

十一月に初雪が観測されるのは五十四年ぶりのことであり、都心での十一月の積雪は観測史上初のことである。参加者一行は、日本時間八時頃に成田空港第一ターミナル四階のCカウンター付近に集まり、その後は各自でチェックインし、九時三十五分に搭乗を開始した。十時に離陸する豫定であったが、除雪作業のために、三十分遅れての離陸となった。

約三時間半後、中國現地時間十三時過ぎに杭州空港に到着した。この日の杭州市の天気は、やや雲が出ていたが、概ね晴れであった。この時期の浙江省の空気は冷たく、寒く感じられた。杭州空港で市岡聰、胡建明、柴田憲良、池美玲、フランチェスカ・タロッコ、吉田一彦、ルチア・ドルチェの七氏と合流した。また、現地添乗員の原氏が空港の出口で待っていた。

十四時十五分に大型バスで空港を出発し、台州市天台縣へ向かった。胡氏とタロッコ氏は、臺灣から来る王芳氏を待つことになり、胡、タロッコ、王の三氏は、別の車で後から天台縣へ向かうことになった。

参加者一行は、十五時半に途中のサービスイアで十分程休憩し、十七時に天台縣の天台山大酒店（ホテル）に到着した。ホテルでは、天台山でガイドを務める盛氏が待っていた。各

寧波における國際シンポジウム並びに浙江省寺院調査報告（久保田）

自部屋で小休止した後、十八時にホテルのロビーに集合した。そして王氏が合流し、大型バスでホテル近くのレストランへ移動した。十八時半からレストランで夕食會が開かれ、十九時五十分に終了した。その後、大型バスでホテルへ向かい、二十時にホテルに歸着して、この日の豫定は終了した。

十一月二十五日（金）

この日の台州市天台縣の天気は曇りであった。時折小雨が降るような天気であり、終始寒く感じられた日であった。龔輪顯量氏をはじめとした十名程は、國清寺における朝の勤行の開始に間に合うように同寺に行くことを、前日より計畫して、早朝三時半にタクシーで天台山大酒店（ホテル）を出発し、國清寺の朝の勤行に參列した。

残りの参加者一行は、五時に大型バスでホテルを出発し、五時十分に國清寺に到着した。そして、大雄寶殿で行われていた勤行に參列し、勤行は五時四十分に終了した。そして一行は、六時に大型バスでホテルに歸着した。七時から各自朝食を済ませ、八時に再び大型バスで出發し、國清寺へ向かった。

八時半に天台山の國清寺に到着した。天台山は、天台智顛

が天台宗を開闢した地である。古來天台山では、周の靈王の太子である王子晉が、右弼真人という神として、天台山内の桐柏山にいと信じられていた。

天台山の佛教の歴史は、東晉の曇猷が北方より入山して萬年寺を建て、赤城山に入ったことに始まる。智顛は、五七五年に金陵を去って天台山に入山し、佛隴峰の北に一寺を建て、寺は後に修禪寺と號した。五八五年に智顛は天台山を下る。その後、光宅寺、玉泉寺等の講説期間を経て、五九五年に再び天台山に入山した。そして智顛は、五九七年に石城寺で入寂する。後に天台山には、日本の最澄や圓珍も來山した。

天台山内の國清寺は、天台山佛隴峰の南麓にある。天台山においては最も有名であり、根本道場とも言うべき寺である。智顛の入寂後の五九八年に、後に煬帝となる晉王廣が創建に着手したことに始まる。初めは天台寺と稱したが、六〇五年に煬帝より國清の敕額が下され、國清寺と名を改める。智顛の弟子、章安灌頂は、六三二年にこの寺で寂した。

その後、會昌の法難で荒廢したが、八五一年に重建され、一〇〇五年には景德國清寺と名が改められた。宋代以降、國清寺は禪寺としての性格を強くする。胡建明氏によれば、現在の國清寺には、百三十人程の僧侶がいるという。

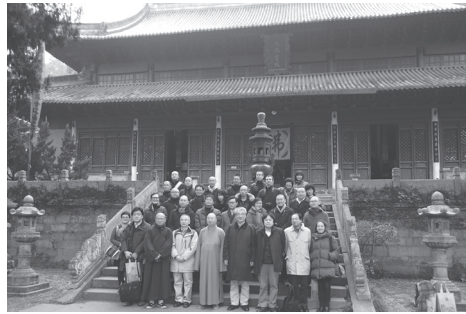
まず、参加者一行は、國清寺に到着すると、山門、彌勒殿、雨花殿、大雄寶殿の順に進んだ。山門には「國清講寺」の額が掛かっていた。彌勒殿の中央には布袋尊像が安置され、裏には韋馱天の像があつた。雨花殿内には、四天王像がある。そして、大雄寶殿の本尊は金色の釋迦如來像であり、兩脇には阿難と迦葉の立像、裏には觀音菩薩像が安置され、殿内の周りには、羅漢像が並べられていた。

大雄寶殿を視察した後、一行は應接室へ通され、天台山方丈、允觀師と面會した。允觀師は、國清寺の「國清」という言葉には、國が清らかであれば國は安定するという意味があることや、現在の國清寺の建物は、主に清代の建築であることとを話して下さった。そして、國清寺では古來、日中の交流が盛んであることに觸れ、これからも交流が續くであろうと述べられた。

允觀師に對して大久保良峻先生は、以前に來た時より國清寺の周邊が變化したことに驚き、再び來ることができたことをうれしく思うと語った。また、歓迎に對する謝意を傳えた。なお、允觀師と大久保先生の會話は、胡氏が通譯した。面會の後、一行は允觀師より『國清百錄』、『摩訶止觀』等の文獻を頂き、允觀師とともに、應接室と大雄寶殿前で寫眞を撮つ

た。

允觀師に禮を告げて別れた後、隋の時代からあるという隋梅を視察した。ガイドの盛氏によれば、この梅は今でも花を咲かせるという。隋梅を見た後に石段を上ると、大雄寶殿裏から國清寺内にある隋塔が見えた。隋梅の次には、寺内の博物館と羅漢堂を視察した。羅漢堂の内部には、五百羅漢像が並べられていた。



羅漢堂の次には、三聖殿、大徹堂に進んだ。三聖殿内の中央には、阿彌陀如來像が安置され、兩脇には觀音菩薩像と勢至菩薩像がある。大徹堂は、國清寺の僧侶が修行をする場である。坐禪の最中ということもあり、中を見せてもらうことはできなかった。

その後、参加者一行は、國清寺内にある隋塔を視察した。隋梅を見た後に大雄寶殿裏から見えた塔である。この塔は、

寧波における國際シンポジウム並びに浙江省寺院調査報告（久保田）

五九八年に煬帝が、智顛の恩に報いるために建てたものである。塔近くの説明書きによれば、この塔の高さは五十九四メートル、六角九重の塔で、中央部分が吹き抜けになっている樓閣式の組積式構造であるという。大雄寶殿裏から見たときには、上部に木や草が茂っているのが確認できた。中に入ることはできなかったが、近くで見ることにより、塔の大きさを體感することができた。

十時二十分に隋塔の視察が終わり、一行は、小型バス二台中で天台山内の石梁飛瀑へ向かった。小型バスで石梁飛瀑へ移動中、十時四十五分頃、二台中一台のバスがオーバーヒートを起こしてしまったが、すぐに代わりのバスが手配された。

濃霧の中、十一時二十分に石梁飛瀑に到着した。石梁飛瀑は、智顛より先に天台山に入山した定光が、石橋庵という草庵を結んでいた地である。定光は、智顛の來山を豫言した人物とされる。石橋庵は上・中・下方廣寺の前身とされ、上方廣寺は焼失し、現在は中方廣寺と下方廣寺が残っている。

一行は到着後、まず石梁飛瀑近くの中方廣寺に入り、瀑布を上から視察した。瀑布の上には、自然の石梁が架っている。中方廣寺内は、改装工事のため、寺の奥に進むことはできなかった。中方廣寺の説明書きによれば、同寺は一一〇一年

に建てられ、同寺から石梁を渡った對岸には、銅製の堂があるという。因みに、現在石梁を渡ることは禁止されている。

その後、中方廣寺を出て川を渡り、石段を下って下方廣寺に着いたが、ここでは映畫の撮影が行われていたため、寺の正面は封鎖されていた。下方廣寺をさらに下ると、瀑布を下から見ることが出来る場所に着いた。ガイドの盛氏によれば、瀑布は約三十五メートルの落差があるという。

瀑布を視察した後、再び下方廣寺に行くと、撮影がまだ終わっていないため、同寺の裏から入り、中を少しく視察した。五百羅漢堂を視察した後、大雄寶殿に入ったが、撮影中のために殿内をよく見ることはできなかった。本尊は釋迦如來像であり、兩脇に迦葉と目連の立像が配されているという。十二時半には石梁飛瀑一帯の視察が終わり、参加者一行は小型バス二台で移動し、十二時五十分より、石梁飛瀑近くのホテルで晝食を取った。

晝食を終え、再び小型バス二台に乗り、十四時に天台山内の眞覺寺付近に到着した。バスを降り、霧の中を二十分程歩くと眞覺寺に着いた。眞覺寺は、五九七年に智顛の遺骸が葬られ、塔が建立されたことに始まり、定慧眞身塔院と稱した。一〇〇八年に眞覺寺の名に改められ、その後は久しく荒廢し

たが、明代の隆慶年間に眞稔が中興した。

一行は、「眞覺講寺」の額が掛かった天王殿を通り、「智者肉身塔」という額が掛かった堂の前に着いた。堂内に入ると、中心に六角の白い塔があつた。この塔が、智者眞身塔、或いは智者肉身塔と呼ばれる塔である。塔は二層構造であり、第一層目の正面に金色の智顛の像が安置されていた。また、堂内の壁には、中國天台宗の歴代諸師の肖像畫が掛けられていて、正面の壁には、智顛の肖像畫があつた。視察後、一行は石段を下り、小型バス二台に乗って天台山内の高明寺へ移動した。

十五時に高明寺に到着した。高明寺がある場所は、智顛が天台山内の佛隴峰で『維摩經』を講説していた時に、經が風に飛ばされ、後に風が止み、經が留まったところと伝えられる。この場所に智顛が居を構えたのが、この寺の始まりであるという。唐代に寺として整備され、九三六年に智者幽溪道場と名付けられた。一〇〇八年には、淨名寺と名が改められ、その後、名は高明寺に戻される。明代に一時荒廢したが、一五九六年に傳燈により重建された。

参加者一行は、「高明講寺」の額が掛かった天王殿を通り、大雄寶殿前に着いた。大雄寶殿内では、勤行の最中であり、『法

華經』化城喻品が讀誦されていた。殿内では、勤行の邪魔にならないよう、静かに視察を行った。大雄寶殿の本尊は、釋迦如來像であり、兩脇に文殊と彌勒の兩菩薩像が配され、裏には觀音菩薩像がある。

大雄寶殿を視察した後、鐘樓である地藏殿を視察した。地藏殿は四層構造の高い建物であった。成瀬隆順氏が殿内の鐘を打ち、参加者の多くが鐘の音を聞くことができた。そして、十五時半に高明寺の視察を終え、天台山の視察は終了した。

天台山の視察を終え、一行は小型バス二台に乗り、宿泊した天台山大酒店（ホテル）に向かい、十六時に到着した。ここで大型バスに乗り換え、十分後に寧波市へと出發した。出發の際、ここで別れるガイドの盛氏が一行を見送ってくれた。寧波市へ向かう途中、雨が降り出し、一時的に雨足は強くなった。十八時に途中のサービスイリアで休憩をして、十九時には寧波市内のレストランに到着し、ここで夕食を取った。

夕食の會場では、すでに上島亨氏と佐藤文子氏が待っていた。二氏は都合により、一行よりも一日遅れて現地入りしていた。以降、一行には、上島亨、佐藤文子の二氏に加わるようになった。夕食の後、再び大型バスで市内を移動し、二十一時に寧波東港波特曼酒店（ホテル）に到着して、この

日の豫定は終了した。

十一月二十六日（土）

この日の寧波市の天氣は雨であった。特に早朝は雨足が強く、参加者一行は雨が降る中、寧波東港波特曼酒店（ホテル）近くにある七塔寺に向けて、七時に出發した。ホテルのロビーに集合した際には、原口耕一郎氏と劉鹿鳴氏が一行に加わった。そして、十分程歩くと、街中にある七塔寺に到着した。

七塔寺は、寧波市江東區にある。唐代の八五八年に、當時の明州府の官吏、任景求が自宅を寄進したことに始まる。天童寺の心鏡藏奘が開山として招かれ、初めは東津禪院と稱した。以降、七塔寺は隆盛を誇り、宋・元代には多くの名僧を輩出したという。また、明代末から清代初頭には、慈運靈慧によって中興され、現代においては、月西大和尚によって再興された。

七塔寺に着くと、一行は山門から入り、圓通寶殿、三聖殿の順に進んだ。圓通寶殿内中央には、千手觀音像が安置されていた。三聖殿の本尊は、彌陀、觀音、勢至の三尊である。金色の大きな立像であった。殿内の三尊像前には、明代の大きな拜石が床下に安置され、ガラスの床越しに見えるように

なっていた。次には、七塔寺開山、心鏡の舍利塔を視察した。「心鏡禪師眞身舍利塔」の額が掛かった建物の中に、石造りの舍利塔があった。

舍利塔の視察を終えると、参加者一行は地下に續く階段を下り、巨大なホールに通された。その後、應接室に通され、七塔寺方丈、可祥師と面會した。可祥師は、一行に對して歓迎の意を伝えられた。そして、七塔寺ではこの八十年間、長らく受戒式をしていなかったが、今年受戒式を行ったこと、七塔寺は日本との繋がりが強い寺であること、七塔寺の歴史が近代の佛教研究により解明されていることをお話しして下さった。また、この日の國際シンポジウムに参加できなくなつたことを陳謝されていた。

これに對して、大久保良峻先生は、前年の初めての來寺の際に、七塔寺の伽藍が立派であつたことから、方丈と信者の力の大きさを感じたことを述べた。また、方丈の可祥師は、僧侶としてだけでなく、學問研究にも精通していると述べ、今回の國際シンポジウム「漢字文化と佛教」の主旨に理解を示し、協力して下さつたことに對する謝意を傳えた。なお、可祥師と大久保先生の會話は、胡建明氏が通譯した。面會の後、一行は可祥師とともにホールで寫眞を撮つた。

この日に開催される國際シンポジウムは、七塔寺で行う豫定であつたが、豫定を變更して、宿泊している寧波東港波特曼酒店に隣接するホテル、寧波東港喜來登酒店の會議室で行うことになった。そのため、一行はホテルに戻り、各自朝食を濟ませた。そして、九時半から國際シンポジウムが始まつた。参加者には、プログラム、ポスター、参加者

名簿、研究發表概要集、各研究發表の資料等が配られた。國際シンポジウムの概要については後述する。

十二時過ぎには、シンポジウムの午前の部が終わり、参加者一行は七塔寺で晝食を取るため、同寺に移動した。七塔寺で振舞われた晝食は、精進料理であつた。晝食の際、一行には、可祥師の論文「神照本如生平及其思想」が配られ、十三時二十分に晝食會は終わった。この時に、フランチェスカ・タロッコ氏は一行に別れを告げ、同氏の同行はここまでとな



った。晝食の後、十三時半からは、七塔寺に新しく開設されるという図書館を視察した。この図書館は、完成後に寧波市の市民に開放されるという。

図書館の視察を終えると、参加者一行はシンポジウムの会場に戻り、十三時四十五分よりシンポジウムの午後の部が始まった。午後の部は、十七時過ぎに終了した。

シンポジウムが終わると、次の日に視察する豫定であった天童寺の方丈、誠信師が、一行を接待して下さることになったため、一行は、豫定を變更して天童寺へ向かうことになった。そして、十七時半に大型バスでホテルを出発した。暗いためか、天童寺のバスの入口がわからず、到着が若干遅れたが、十八時半に天童寺に到着した。暗く足元がよく見えない中、天王殿まで進み、天王殿の前で十分程待っていると、脇の入口から寺の中に通された。

天童寺は、寧波市鄞州区にある。西晉の永康年間に、義興が、太白山に一字を建立したのが始まりとされる。後に寺は兵火にかかり、七三二年、法瑠が寺を山麓の東に建てた。この地を古天童と言い、その後現在の地に移されてからを新天童と言う。

宋代の一一三二年には、中興開山である宏智が僧堂、傑閣、

盧舍那閣、七塔等を建て、二大池を作り、寺観は一新された。南宋時代中頃には、入宋していた榮西が、師の懐敏に従って天童寺に來寺した。また、日本の曹洞宗の開祖である道元は、入宋時に天童寺の如浄に師事している。

参加者一行は、まず天童寺の大雄寶殿を視察した。大雄寶殿の本尊は、金色の釋迦、藥師、彌陀の三如來像であった。中央の釋迦如來像の兩脇には、阿難、迦葉の立像が安置されている。大雄寶殿の視察を終えると、食堂に通され、一行には夕食として精進料理が振舞われた。十九時四十分夕食が終わり、その後、十九時四十五分からは、應接室で天童寺方丈、誠信師との面會が始まった。

まず、誠信師は、一行に對して歓迎の意を伝えられた。そして、現在寧波市内にある六百餘の寺の中で天童寺が最も大きいこと、現方丈は第百八十二代になることをお話された。

また、日本の道元が、三年間天童寺で修行したことをはじめ、他にも多くの日本の僧が天童寺で修行したことに觸れ、天童寺と日本の關係の強さを説明し、これからも日本との絆を守りたいと仰っていた。

大久保先生は、誠信師に對し、當初の豫定を變更し、夜の天童寺に來ることができたことをうれしく思うと述べた。暗

いたために目で景色を見ることはできないが、心で景色を見るという情趣を味わえたと言った。また、美味しい食事を留意し、歓迎して下さったことに對して謝意を表した。なお、誠信師と大久保先生の會話は、胡氏が通譯した。そして、面會の後、一行は誠信師とともに寫眞を撮った。

その後、バスに戻る途中、千僧鍋と言われる大きな鍋が展示されている部屋に通された。説明書きによれば、この鍋は一六四一年に鑄造されたもので、深さは百七センチ、直径は二百三十六センチ、重さは約二千キロであり、二石の米を入れることができるという。現在は使われていないこの鍋を見て、かつての天童寺で修行していた僧侶の数の多さを想像することができた。

一行は、二十時半に大型バスで天童寺を出發して、二十一時半に寧波東港波特曼酒店（ホテル）に歸着し、この日の豫



定は終了した。なお、胡氏の同行はこの日までとなり、劉鹿鳴氏の同行は、この日のみであった。

十一月二十七日（日）

この日の寧波市の天氣は、雲が多かったが、午後になるにつれて徐々に晴れていった。参加者一行は、八時前後に各自朝食を済ませ、九時四十分大型バスに乗り、阿育王寺に向けて寧波東港波特曼酒店（ホテル）を出發した。

この日に視察する阿育王寺と、二十八日に視察する普陀山は、現地ガイドの劉氏が務めることになった。劉氏は日本語が話せないため、添乗員の原氏が通譯を務めた。原氏が言うには、最近では中國における日本人觀光客が減少しているために、日本語を話すことができるガイドも減っているとのことである。また、ガイドの劉氏によれば、近年の寧波市の發展は著しく、大型バスで阿育王寺に向かう途中でも、地下鐵や高速道路の建設現場を目の当たりにした。

一行を乗せた大型バスは、十時二十分に阿育王寺に到着した。阿育王寺は、寧波市鄞州區にある。同寺の起源は、西晉の二八二年に、劉薩訶が舍利塔湧出の感應を得たこととされる。梁の時代には、阿育王寺の額が下された。宋の初めに重

建され、一〇〇八年に廣利禪寺の額が下される。大覺懷璉が住持となり、大いに興隆した。明代には、育王禪寺と稱するようになった。

一行は阿育王寺に着くと、まず山門の前で集合寫眞を撮った。山門に掛けられている「阿育王寺」の額は、江澤民が書いたものである。山門を通り、放生池を過ぎると、元代に建てられたという黄色い西塔があった。西塔の次には、八相示現のレリーフに囲まれた廣場に着く。この廣場を過ぎると、天王殿に到着した。天王殿の中央には、布袋尊の像が安置され、布袋尊像の裏には韋馱天の像、そして殿内の周りには四天王の像が配されている。

天王殿の奥にあるのは、清代の建築であるという大雄寶殿である。大雄寶殿前の兩脇には、樹齡千年とされる楠があった。大雄寶殿内には、釋迦、藥師、彌陀の三佛の像が安置され、中央の釋迦如來像の兩脇には阿難と迦葉の像が配されている。殿内を進むと、釋迦如來像の裏に觀音菩薩像があり、裏の出入り口の兩脇には、文殊菩薩と普賢菩薩の像があった。大雄寶殿の奥には、清代に建築された舍利殿がある。舍利殿内部の中央には、舍利塔があり、舍利塔の裏には涅槃像が安置されていた。

寧波における國際シンポジウム並びに浙江省寺院調査報告（久保田）

ただし、佛舍利はこの舍利殿にあるわけではなく、舍利殿のさらに奥の藏經樓にあるという。今回は、ガイドの劉氏の計らいにより、藏經樓の佛舍利を見る機會を得た。参加者一行は、履物を脱いで藏經樓に上がった。そして、佛舍利を見るにあたり、阿育王寺の僧侶から説明を受けた。

説明によれば、阿育王寺の佛舍利は、頭頂の部分の舍利であるという。また、かつてアショーク王は、未來の衆生を救うため、そして、未來の衆生に敬服心を起させるために佛舍利を塔に納めたという旨の法話があった。その後、一行は順番に佛舍利を見た。なお、僧侶の話は、添乗員の原氏に譯してもらった。話術の巧みな僧侶が印象的であった。

一行は藏經樓で佛舍利を見た後、十二時四十分大型バスに乗り、晝食會場に向けて移動した。十三時十五分に寧波市内のホテルに着き、ホテルの駐車場で原口耕一郎氏と別れた。同氏の同行はここまでとなった。一行はホテルで晝食を取り、十四時に晝食を終え、普陀山へ行くための中繼地、舟山島へ向けてホテルを出發した。

普陀山は、舟山市普陀區にある島であり、觀音信仰の靈場として有名である。移動中のバス内では、ガイドの劉氏から、普陀山についての説明があった。劉氏によれば、普陀山が屬

する舟山群島には、島が全部で千餘あり、人間が活動できる島は二百程あるという。また、普陀山に一日に訪れる観光客は、約二萬人で、正月はさらに多いという。そして、劉氏からは、大陸と舟山島に架っている橋は、海峽の流れが激しいためにアーチ式の構造になっているという説明があり、實際に一行を乗せた大型バスは、幾つかのアーチ式の橋を渡った。

さらに、劉氏は普陀山における注意事項を述べた。まず、普陀山は島で海が近く、湿度が高いため、ホテルの室内では空調を活用して欲しいとのことであった。また、普陀山は飲食物を全て島外から得ているために、物價が高く、人が多い割には車の数が少ないという。

参加者一行を乗せた大型バスは、十五時十分に舟山島内のサービスイリアに停まり、十分程休憩した。休憩の後に出発し、十六時十分に舟山島の船着場に到着した。舟山島は、やや雲が出ていたが概ね晴れであった。ここから普陀山まで高速船に乗って向かうことになる。高速船には大きな荷物を乗せることが難しいため、一行は一泊分の手荷物を纏め、大きな荷物は大型バスに置いていくことになった。

そして、荷物検査等の安全検査を経て高速船に乗り、十七時に高速船は出航した。十七時十五分に普陀山に着く頃には、

すでに暗くなっていた。高速船から降りた後、小型バス二台で宿泊する中信普陀酒店（ホテル）に向かい、十七時二十分にホテルに到着した。その後、十八時より同ホテルで夕食會が開かれ、約一時間で終わった。夕食の後、数名が觀劇のために外出したが、参加者全體としてのこの日の豫定は終了した。

十一月二十八日（月）

この日の普陀山の天氣は、やや雲が出ていたが晴れであった。また、海に近いこともあり、風が強かった。参加者一行は、七時前後に各自で朝食を済ませ、七時半に中信普陀酒店（ホテル）のロビーに集合し、八時にホテルを出発した。ホテルから出て海沿いを歩き、石段を上ると竹林に着いた。竹を見ると幹が紫色であり、ガイドの劉氏によれば、紫竹林という地名の由来の一つになっているという。

八時十五分には、「不肯去觀音院 補怛紫竹林院」という額が掛かった門の前に着いた。この門を通り、黄色い外壁に挟まれた參道を下ると、不肯去觀音院に着く。一行は、不肯去觀音院を視察する前に、ガイドの劉氏に潮音洞へと案内された。潮音洞は、普陀山の開基とされる日本僧慧萼の上陸の

地である。一帯は岩場であり、岩の割れ目の奥深くまで波が入り込んでいる潮音洞の様子を、上から確認することができた。

常盤大定『支那佛教史蹟踏査記』（龍吟社、一九三八年）では、この地の岩石の断面が竹に似て、紫色を帯びているために、一帯に紫竹林の地名が付いたとされる。ガイドの劉氏が言うには、紫色の岩は文化大革命の際に破壊されたという。前に見た紫色の竹林のことも考えると、紫竹林という地名の由来は判然としない。

潮音洞を視察した後、八時三十五分からは、不肯去觀音院の堂内を視察した。普陀山の開基とされるのは、日本僧の慧夢である。『佛祖統紀』卷四二によれば、八五八年、入唐していた慧夢は、五臺山で得た觀音菩薩像を日本に持ち歸ろうとしたところ、普陀山付近で船が進まなくなったため、慧夢は普陀山に上陸して像を同山に留め、室を築いて像を奉じたという。不肯去觀音院の起源は、このように伝えられ、現在普陀山で最大の寺院である普濟寺の前身は、この不肯去觀音院とされる。

ガイドの劉氏によれば、現在の不肯去觀音院の建物は、近年中國政府によって建てられたという。堂内には、觀音菩薩

像が安置されていた。堂の近くには、「禁止捨身燃指」と書かれた捨身供養と焼身供養を禁じる碑があった。これは、文化大革命で一度破壊されたものを、一九八〇年代に修復したものであるという。不肯去觀音院から補怛紫竹林に続く回廊には、日本の諸寺院が寄進したと考えられる石造りの觀音菩薩像が並べられていた。

参加者一行は、不肯去觀音院の次には、同じ敷地内にある補怛紫竹林院を視察した。補怛紫竹林院の天王殿には、中央に布袋尊像が安置され、周りには四天王の像が配されていた。天王殿を過ぎると、圓通寶殿があり、本尊は白い觀音菩薩像である。圓通寶殿の裏にある大自在殿に入ることはできなかったが、内部で讀經が行われていたことを確認した。そして、圓通寶殿の視察の後、一行は各自自由に敷地内を視察し、九時に入口の門の前に集合した。

その後、一行は歩いて坂を上り、九時十分に南海觀音の入口に到着した。南海觀音は、一九九七年に完成した巨大な觀音菩薩の立像である。現在、普陀山のシンボルとなっている。立像は金色であり、像本體の高さは十八メートル、蓮華臺は二メートルであり、下にある功德室等を含めれば、全體の高さは三十三メートルである。また、像の顔の重さは二トンあ

るという。一行は、十時十分の集合時間まで、各自自由に南海觀音を視察した。

立像の下にある功德室には、南海觀音を建立する際に集まつた寄付の證として、諸像が並べられていた。南海觀音の建立に掛かった費用は、全て寄付で賄われたという。功德室の下の部屋には、大きな金屬製のレリーフが、周りの壁一面に飾られていた。さらに、立像を圍む屋外の壁にも、一面に石造りのレリーフが飾られていた。立像の裏の壁には、觀音菩薩の大きなレリーフがあり、兩側の壁には、玄奘と鑑眞の生涯を描いたレリーフ等があった。南海觀音の視察を終えると、一行は徒歩でバスの停留所まで移動し、十時二十五分に二台の小型バスに乗り、普濟寺へ向かった。

十時半に、參加者一行を乗せた小型バス二台は、普濟寺の駐車場に到着した。普濟寺は、現在の普陀山で最も大きい寺である。前身は、不肯去觀音院とされる。宋代の一〇八〇年に改築され、寶陀觀音寺の額が下された。明代に至ると、倭寇のために荒廢するが、一五六七年に少しく修復され、一五七八年には眞表により、天王殿と雲會堂が建てられる。一六〇五年には、眞歇清了が圓通寶殿を建立し、普陀禪寺の額が下された。現在普濟寺は、清了を開山とする。そして、

清代の一六九九年には、普濟禪寺と名が改められた。

一行は普濟寺に着くと、門前の放生池に架る石橋を渡つた。五百年前に造られた石橋は三本ある。池の中央に架る橋は、かつて皇帝のみが渡ることができた橋である。寺の門に向かつて右側の橋は、かつては役人専用の橋であり、今回一行はこの橋を渡つた。そして、門に向かつて左側の橋は、一般人専用の橋とされていた。

橋を渡ると、一行は東門から中に入った。因みに、中央の門は常に閉鎖されている。これには、清の乾隆帝が普濟寺の門限を破つたときに、中央の門を開けてもらえなかつたことに立腹し、以降常に中央の門を閉鎖させたという傳説がある。現在は、新しい方丈や國の指導者を迎える際には開けられるという。一行は、中央の門に向かつて右側の東門から入り、布袋尊像と四天王像がある天王殿の脇を通ると、圓通寶殿の前に着いた。そして一行は、各自自由に普濟寺を視察することになった。

圓通寶殿では、水陸會が執り行われていて、多數の僧侶が行道して殿内に入っていく場面を見ることができた。水陸會が終わると、殿内は開放された。圓通寶殿の本尊は、大きな觀音菩薩像であり、本尊の兩脇には、『法華經』普門品の

經文が書かれた大きな幕が掛かっていた。圓通寶殿に向かつて右側には文殊殿と伽藍殿、左側には普賢殿と祖堂がある。

圓通寶殿の奥には法堂があった。法堂の本尊は、釋迦、藥師、彌陀の三如来像であり、天井一面には、大きな龍の繪が描かれていた。法堂に向かつて右側には普門殿、左側には地藏殿がある。

参加者一行は視察後、十一時四十五分に西門から出たところに集合し、徒歩で晝食會場まで移動した。十二時から普濟寺近くのレストランで晝食が始まり、晝食の後は、二台の小型バスに乗って移動し、十三時に普陀山の船着場に着いた。その後、安全検査を経て高速船に乗り、十三時半に高速船は出航した。

十三時五十分に、高速船は舟山島の船着場に到着し、一行は下船の後、大型バスに乗って十四時十分に杭州市に向けて出發した。十分程走ったところで、寧波と普陀山のガイドを務めた劉氏と別れることになり、劉氏は一行を乗せたバスを見送ってくれた。十六時十五分には、途中のサービスエリアで二十分程休憩した。

十八時十分には、杭州市の百合花飯店(ホテル)に到着した。このときに、胡建明氏が一行を出迎えてくれた。また、ルチ

寧波における國際シンポジウム並びに浙江省寺院調査報告(久保田)

ア・ドルチェ氏が一行と別れることになった。そして、同ホテルで十九時より、今回の寺院調査における最後の夕食會が開かれた。王芳氏は、この夕食會を最後に一行と別れた。夕食會は約一時間で終わり、この日の豫定は終了した。

十一月二十九日(火)

歸國の日となった。この日の杭州市の天氣は曇りであり、そのために寒く感じられた。参加者一行は、八時から九時にかけて、各自で朝食を済ませ、十時二十五分に百合花飯店(ホテル)のロビーに集合し、大型バスに乗って杭州空港に向けて出發した。上島享氏と佐藤文字氏は、一行とは別の便で歸るため、ホテルで別れることになった。

十一時十五分にバスが杭州空港に着くと、添乗員の原氏と別れ、参加者一行も解散となった。その後、十一時五十分から各自でチェックインを済ませ、十三時二十分より搭乗を開始し、十三時五十分に成田空港に向けて離陸した。約三時間かけて、日本時間十七時四十五分に成田空港に到着し、各自歸宅の途に就いた。

三 シンポジウム概要報告

十一月二十六日に開催された国際シンポジウム「漢字文化と佛教」の進行と、各研究発表の概要を報告する。なお、研究発表は、劉鹿鳴氏が中國語で行い、その他の発表者は日本語で行った。

進行

九時三十分～ 参加者自己紹介

九時四十分～ 開會の挨拶

大久保 良峻（早稲田大學）

以下、発表十五分・質疑五分

九時四十二分～ ①『嘉興藏』と『龍舒淨土文』の一考察
王芳（臺灣中央研究院中國文哲研究所）

十時三分～ ②『梵網經』における孝順思想の再検討
胡建明（早稲田大學大學院）

十時二十四分～ ③北傳佛教の禪法における圓教の特質について——智者大師說『釋禪波羅蜜次第法門』を通して——

劉鹿鳴（南京大學）

十時四十五分～

④漢字文化圏における信仰と儀禮の一齣——韓國の甘露幀畫をめぐる——

池美玲（韓國藝術綜合大學）

十一時六分～

⑤道宣の戒律思想における「大乘」——戒體、圓教、分通大乘——

トーマス・ニューホール（東京大學大學院）

十一時二十七分～

⑥初唐の異國僧——長耳三藏とその周邊——

櫻井唯（早稲田大學大學院）

十一時四十八分～

⑦宋代天台における自行と化他の問題
久保田 正宏（早稲田大學大學院）

十二時三十分～

晝食休憩（於七塔寺）

十三時四十六分～

⑧山外派による修性離合義の解釋
弓場 苗生子（天台宗典編纂所）

⑨鎮源の見た源信——『法華驗記』第八三話「楞嚴院源信僧都」を中心に——

岡田文弘（東京大學大學院）

十四時二十八分～

⑩『法華驗記』と女性——比丘尼舍利說話から見える『法華驗記』の女性觀——

市岡聰（名古屋市立大學）

十四時四十九分～

⑪九品往生と九品中正制度の關係

佐伯憲洋（早稲田大學大學院）

休憩

十五時九分～
十五時十八分～

⑫ 珍海が定義する「信心決定義」と中國諸師の思想

成瀬隆順（早稲田大學大學院）

十五時三十九分～

⑬ 知足著『靈山奇賞』における中國思想の引用

庵谷行遠（早稲田大學大學院）

十六時～

⑭ 最澄の末法觀

柴田憲良（名古屋市立大學）

十六時二十一分～

⑮ 東密における三種悉地の解釋について
大鹿眞央（早稲田大學・大正大學）

十六時四十二分～

⑯ 聖の原義と表象
佐藤文子（佛教大學）

十七時五分～

閉會の挨拶

大久保良峻（早稲田大學）

司會

①～③ ルチア・ドルチェ（ロンドン大學）
④⑤ 吉田一彦（名古屋市立大學）

⑥～⑧ 曾根原理（東北大學）

⑨⑩ 菊地大樹（東京大學）

⑪～⑬ 上島享（京都大學）

⑭～⑯ 養輪顯量（東京大學）

通譯 ①～③、⑦、⑬ 胡建明（早稲田大學大學院）

④～⑥、⑧～⑫、⑭～⑯

王芳（臺灣中央研究院中國文哲研究所）

研究發表概要

① 『嘉興藏』と『龍舒淨土文』の一考察

臺灣中央研究院中國文哲研究所 王芳

王芳氏の發表は、宋の士大夫、王日休が著した『龍舒淨土文』についての發表である。大正藏、續藏、『嘉興藏』に收められている『龍舒淨土文』の諸本を比較することによって、同書の流傳と増廣の様子を解明しようと試みるものであった。王芳氏は、同書の増廣に、南宋の聶允迪や元代の呂元益といった人物が深く関わっていることを指摘した。

② 『梵網經』における孝順思想の再検討

早稲田大學大學院 胡建明

胡建明氏の發表は、『梵網經』の孝順思想に再検討を加え、東アジアの大乗佛教における孝順思想の一面を明らかにし

ようにするものである。胡氏は、『梵網經』の孝順思想が、中國の儒教思想と同じものではなく、大乘經典の隨所に見られるものであると主張し、孝順思想を根據に『梵網經』を偽經と位置付けることに對して疑問を呈した。

③北傳佛教の禪法における圓教の特質について——智者大師說『釋禪波羅蜜次第法門』を通して——

南京大學 劉鹿鳴

劉鹿鳴氏の發表は、『釋禪波羅蜜次第法門』の内容を分析することを通して、智顛の禪學を論じるものである。劉氏によれば、中國の禪學は、同書で言われる非世間非出世間禪、つまり非次第禪に屬するという。その上で劉氏は、インドの禪學が息法や色法を重んじることに對して、心法や心地を重視することが中國禪學の特徴であると説明した。

④漢字文化圏における信仰と儀禮の一齣——韓國の甘露幀畫をめぐる——

韓國藝術綜合大學 池美玲

池美玲氏の發表は、韓國における水陸齋と甘露幀畫の關係について論じるものであった。水陸齋は、李氏朝鮮時代に代

表的な佛教儀禮となった。池氏は、現代韓國の水陸齋や現存する甘露幀畫を、畫像と映像で紹介した。また池氏は、水陸齋で使われた水陸畫が残っていない理由と、それとは對照的に甘露幀畫が残っている理由について、私見を述べた。

⑤道宣の戒律思想における「大乘」——戒體、圓教、分通大乘——

東京大學大学院 トーマス・ニューホール

トーマス・ニューホール氏の發表は、唐代の道宣の『羯磨疏』という註釋書における戒體、圓教、そして分通大乘の思想を考察するものである。ニューホール氏は、道宣が同書で『四分律』を大乘に通じるものと位置付けた背景を説明しようと試みた。この過程でニューホール氏は、道宣の理論の複雑さと缺點も指摘した。

⑥初唐の異國僧——長耳三藏とその周邊——

早稻田大學大学院 櫻井唯

櫻井唯氏の發表は、素性が不明確な初唐の長耳三藏という人物を扱ったものである。まず櫻井氏は、中國における長耳三藏に關する言説を、四つの系統に分類した。その上で櫻井

氏は、各系統における「長耳三藏」が、同一の人物に歸着しないことを證明しようと試みた。その中で、長耳三藏を那連提耶舍とする従來の學說に對しても疑問を呈した。

⑦宋代天台における自行と化他の問題

早稻田大學大學院 久保田 正宏

この發表は、宋代の知禮が唱えた初心起教の説が、後の宋代天台において、どのように繼承されたかという思想史の一端を説明しようとするものである。近世の日本の論題「初心起教」には、十乘觀法と起教を同一視する考えが現れている。發表では、こうした考えが、知禮より後の了然や善月といった宋代天台諸師と深く関わっている可能性を指摘した。

⑧山外派による修性離合義の解釋

天台宗典編纂所 弓場 苗生子

弓場苗生子氏の發表は、『十不二門』の修性不二門に説かれる離・合の二義を、宋代天台の諸學匠がどのように解釋したかという問題を扱ったものであり、發表では、考察の對象が山外派の源清と智圓、そして後山外派の仁岳に絞られた。弓場氏は、山外派が一概に修二性一の合義を重視したという

安藤俊雄氏の説に、再検討を加える必要性を訴えた。

⑨鎮源の見た源信——『法華驗記』第八三話「楞嚴院源信僧都」を中心に——

東京大學大學院 岡田 文弘

岡田文弘氏の發表は、鎮源撰『法華驗記』の第八三話「楞嚴院源信僧都」の中で、源信が兜率生天を拒否し、極樂往生を選択したとされる挿話に着目し、鎮源の法華思想について論じるものであった。岡田氏は、同挿話で『法華經』勸發品の教説が擴大解釋され、鎮源によって、法華功德による極樂往生という新しい可能性が提示されたと主張した。

⑩『法華驗記』と女性——比丘尼舍利説話から見える『法華驗記』の女性觀——

名古屋市立大學 市岡 聰

市岡聰氏の發表は、『日本靈異記』、『三寶繪』、『法華驗記』の比丘尼舍利に關する説話を比較し、『法華驗記』における女性觀を浮かび上がらせようとするものである。市岡氏は『法華驗記』から、尊敬の對象としての比丘尼舍利像を示し、同書には女性を見下す思想がないことを強調した。さらに、こ

うした考えが、一乘思想と深く関わっていると結論した。

⑪九品往生と九品中正制度の關係

早稻田大學大學院 佐伯憲洋

佐伯憲洋氏の發表は、善導の九品往生の思想と、漢代から唐代に用いられた官僚登用制度、九品中正制度の關係について論じるものである。佐伯氏は、九品往生の思想と九品中正制度の性説を比較し、類似點と相違點を確認した。その上で、善導の『觀無量壽經疏』が、九品中正制度の性説の影響を受けている可能性を指摘した。

⑫珍海が定義する「信心決定義」と中國諸師の思想

早稻田大學大學院 成瀬隆順

成瀬隆順氏の發表は、淨影寺慧遠と吉藏の著作を中心に、珍海の「信心決定義」の論據を探り、「信心」と「決定」の關係性を再検討するものである。成瀬氏は、「信」と「決定」を同義とする解釋の起源を原始佛教と認めた上で、こうした解釋が慧遠の『大乘義章』で敷衍され、吉藏撰『金光明經疏』や珍海撰『三論玄疏文義要』に引き繼がれたことを示した。

⑬知足著『靈山奇賞』における中國思想の引用

早稻田大學大學院 庵谷行遠

庵谷行遠氏の發表は、江戸時代の寛延年間に、在家の法華信者、知足が著した『靈山奇賞』を扱うものである。庵谷氏は、知足が同書で、淨土眞宗本願寺派の義教という學僧が著した『千五百條彈禪改』に反論する際に、『論語』や『孟子』といった文獻、そして杜常の漢詩を引用している様子を紹介した。

⑭最澄の末法觀

名古屋市立大學 柴田憲良

柴田憲良氏の發表は、最澄の末法觀の讀解を通して、最澄の時間認識の特質と、その思想の淵源を説明しようとするものであった。柴田氏は、最澄による像末の理解と、僧綱への批判を確認した。そして、最澄の末法觀が、インドの初期大乘佛教における法滅思想と、北周末から隋初の中國佛教における思想の影響を受けて形成されたという考えを示した。

⑮東密における三種悉地の解釋について

早稻田大學・大正大學 大鹿眞央

大鹿眞央氏の發表は、東密の覺鑲撰『五輪九字明祕密釋』

における『三種悉地破地獄儀軌』の引用の仕方を考察するものである。大鹿氏によれば、覺鏡は『三種悉地破地獄儀軌』の三種悉地眞言と三支分生曼荼羅を説く段の引用を、敢えて避けているという。特に、三種悉地眞言の段の引用を避けた理由は、蘇悉地の思想の排除にあると指摘した。

⑯聖の原義と表象

佛教大學 佐藤 文子

佐藤文子氏の発表は、日本における聖の本質と淵源を明らかにしようとするものである。佐藤氏は、題材の一つとして、日本の聖徳太子を取り上げ、中國湖南省長沙で發掘された『帛書五行篇』の黄老思想における「聖」と關連付けて説明した。その上で、聖を日本という限られた範圍ではなく、アジア文化全體の中で考察する必要があると訴えた。

四 おわりに

本寺院調査では、天台山、寧波市内の諸寺院、そして普陀山という、いずれも日本佛教と關わりがある浙江省の聖地を視察した。今回趣いた寺院は、何れも歴史が深く、伽藍は壮大であり、見るべきものは非常に多かったと言える。また、

天台山の國清寺、寧波市の七塔寺と天童寺では、方丈が参加者を温かく迎えて下さった。参加者は皆、日常では味わうことができない貴重な體驗をすることができた。今回の調査における参加者一同の收穫は、極めて大きいと感じた。

さらに、寧波市で開催された國際シンポジウム「漢字文化と佛教」では、発表者が日頃の研究成果を披露することができ、参加者と關達な意見交換をすることができた。各研究發表の對象となった分野は、インド、中國、朝鮮、そして日本という廣域であり、發表で扱われた文獻や資料も豊富であった。参加者全員にとって、大變有意義な時間であったと言える。

今回の寺院調査では、天氣が概ね良好であったことが幸いであった。バスで寧波市に移動する途中や、寧波市内のホテルから七塔寺に向かう道中を除いては、雨が激しく降ることはなく、屋外における調査も順調に進めることができた。また、全参加者が互いを思い遣り、協力したからこそ、中國の慣れない環境で、シンポジウムと調査を無事に成し遂げることができたと思う。